

第 10 回日本ボバース研究会学術大会基調講演

はじめに

ボバースコンセプトのハンドリングスキルは、近年の神経科学（特に神経系・筋骨格系）の事実と照らし合わせながら、年々発展し、対象者への快適な感覚入力につながっています。一方、ボバースコンセプトの出発点は、子供からご高齢の方々の個別的な希望から出発し、その希望に答えるように、最大限努力し、最後には対象者の希望に少しでもつなげていくところにあります。この考察の過程はクリニカルリーズニングと呼ばれ、ボバース夫妻は、ボバースコンセプトの開始当初からこのクリニカルリーズニングを重要視しており、現在でも継続している概念です。この対象者へのクリニカルリーズニングを深めることが、更なるセラピスト自身の発展にもつながると考えられます。

ボバース臨床実践モデル； Model of Bobath Clinical Practice (MBCP)

MBCP はボバースコンセプトを臨床で実践するために作られたものです。成人分野の話にはなりますが、日本だけでなく世界で行われる IBITA 認定の基礎講習会や上級者コースの中心に据えられています。この MBCP は、ボバースの評価—治療の流れを分かりやすく表現したものと言えます。対象者との最初の出会いでの観察評価、「第一印象での評価であり、姿勢や運動にはどのような特徴があるのか」（機能的な運動分析）、「実際にハンドリングしての評価」（熟練した促通）そして「主要な問題点」（臨床推論）という流れは、ボバースコンセプトの開始当初から変化していないクリニカルリーズニングを背景に作られています。MBCP の評価は、例えば、座位から立位への姿勢変換（STS）や歩行、更衣動作での上肢や手指の使用に見られる動作で、効率的（Positive）もしくは非効率的（Negative）な運動を観察し、評価の手がかり(critical cue)とします。次に基礎講習会で行っている実技の基本ハンドリングの項目の中から、治療場面で使えるのを選択し、ハンドリングを通して感覚運動経験を促通します。ケースがどの程度セラピストによるハンドリングに対して追従してくるかを確認しながら進めます。この評価—治療の経過を経ながら、中枢神経系にどれくらい可塑性（学習）があるのかを臨床推論し、次の治療（展開）につなげていきます。Measurement も必要に応じてデータ測定していきます。

姿勢制御と How to touch (ハンドリング)

姿勢制御は、課題遂行中の個人要因、課題内容、環境面の影響を受けながら調整されており、日常生活活動や手段的日常生活の重要な構成要素になっています。ヒトの立位姿勢は狭い支持基底面であり、高い重心、そして多くの関節が関わり、非常に不安定です。中枢神経系は、全ての運動に対して自動的に身体の COM (center of mass; 質量中心) を二足直立位の足部内に維持してバランスを取るような役割があります。

日常生活に必要な上肢のリーチ活動や手指の運動そして歩行の獲得には、最適な立位姿勢が重要であり、効率的な上肢や下肢の運動には事前に姿勢を調整 (Postural Adjustments ; PAs) することが必要となります。中枢神経障害の症例では、上位運動ニューロン損傷により、陽性徴候や陰性徴候に見られる筋の過緊張や弱化により筋の粘弾性が低下し、姿勢保持や上下肢の機能回復を妨げる要因になっています。多くの筋群が麻痺の影響を受けてしまい、足底からの体性感覚入力が効率よく頭部にまでつながらず、代償的に視覚情報に依存する傾向が多くなります。またこのようなケースのバランス戦略は、足関節戦略が少なくなり、代償的に股関節戦略、ステップング戦略、更に上肢のリーチ把握戦略を用いて立位姿勢を維持 (転倒予防) しようとしています。この結果、上肢機能にも悪影響を与えてしまいます。近年、垂直軸方向の伸展活動を多関節運動連鎖と表現することが多くなり、脊柱に付着する筋群の評価やハンドリングが重要になっています。最適な立位姿勢を目指すためには、腹部・骨盤周囲筋群や上肢、下肢筋群の短縮した筋群の粘弾性を改善し弱化した筋群の活性化をハンドリングによる介入で促す必要があります。

ハンドリングによる介入場面を、歩行機能改善を目標とした①脳卒中ケース②小児 (年長児) ケースを用い、姿勢調整のコンポーネントの評価と治療について動画も一部使いながら説明したいと考えております。

文責 鈴木三央(六地蔵総合病院)

鈴木三央略歴

2020年3月現在

福島県いわき市出身

1983年 国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院
作業療法学科卒業

同年 ボバーズ記念病院入職

2003年 日本ボバーズ講師会議作業療法専任講師成人部門・小児部門専任講師

2004年 日本福祉大学大学院情報・経営開発研究科博士課程修了
人間環境情報博士（久保田競先生に師事）

2009年 国際ボバーズ講師会議基礎講習会講師に認定

2012～18年 IBITA Education Committee

2017年12月 国際ボバーズ講師会議上級講習会講師に認定（Mary先生）

2018年4月 六地藏総合病院へ異動

2019年7月12日 認定作業療法士（終身）

現在 JBITA 副議長